

【第3分科会】提案（B） 防災キャンプを通した自己有用感を高める取組

[助言者]	広島県西部教育事務所芸北支所	支所長	溝口 直子
[発表者]	廿日市市 四季が丘中学校	校長	占部 久恵
[司会者]	廿日市市 七尾中学校	校長	雨河 譲
[運営委員]	東広島市 中央中学校	校長	小島 弘之
[記録者]	東広島市 安芸津中学校	校長	岩本 幸子

1 はじめに

本市では、平成25年5月8日、市内中学校において生徒が自死するという、重大かつ痛ましい事案が発生した。調査委員会による検証の結果、その背景にはいじめがあったことが報告されている。二度とこのような事態を繰り返さないため、市ではいじめへの早期発見かつ組織的な対応を徹底するとともに、平成27年度からは「つながり支援プロジェクト」に全市を挙げて取り組んできた。

「つながり支援プロジェクト」とは、学校生活の中で児童生徒同士の関わりを意図的に設定し、互いに認め合える集団づくりを進めることで、「自分は他者のために役に立っている」という満足感、すなわち自己有用感を育む取組である。その目的は、いじめ等の問題行動の未然防止を図り、学ぶ意欲を高めることにある。先行研究では、自己有用感の高い児童生徒は、いじめに加担しにくく、傍観者となる割合が低い一方で仲裁行動をとる割合が高いこと、また同調圧力の影響を受けにくいことが明らかにされている。現在も、各学校で「つながり支援プロジェクト」を積み重ねており、地域と連携しながら、児童生徒の自己有用感を高める取組を広げてきている。

本稿では、防災キャンプの取組を軸に、学校教育活動全体を通して生徒の自己有用感の育成を図った実践とその推進に向けた学校経営上の取組について報告する。

2 本校の概要

本校は、廿日市市の南部の丘陵地（標高130m）に位置し、瀬戸内海や広島市街、宮島などを望む自然豊かな環境にある。校区は、宮園団地・四季が丘団地から成り、それぞれに小学校がある。平成3年度に開校し、現在の生徒数は214名で、ピーク時の4分の1にまで減少している。家庭環境は比較的安定しているものの、コロナ禍以降は生活習慣の乱れや対人関係に敏感な生徒が増加し、不登校生徒の割合も高くなっている。そのため、令和3年度から広島県不登校SSR推進校の指定を受け、組織的な対応と未然防止を強化してきた。本校では「主体性」「表現力」「協働性」「自己有用感」の4つの資質・能力の育成を目指しており、令和6年度からは「授業改善」「不登校対策」「防災キャンプ」を重点取組と位置付けている。とりわけ自己有用感の育成は、本校の教育活動全体における重要な柱となっている。

3 防災キャンプの取組

(1) 防災キャンプとは

四季が丘団地は、山を切り開いて造成した団地であることから、地域では、自主防災会を組織するなど、防災に関わる意識は総じて高い。その中で、地域の有志が、10年程前から毎年、参加を希望する主に四季が丘小学校児童を対象に開催してきた地域行事が、防災キャンプである。会場は四季が丘小学校で、運営は地域の住民ボランティアであり、地元消防署や日赤看護大学のサポートを得ながら、1泊2日で実施する。実施する内容は、防災に関わる様々なブースを順番に巡っての体験、飯盒炊飯、体育館（テントや簡易ベッド）での宿泊、朝食（軽食）である。

本校では防災教育が系統的に行われていない実態があったため、令和5年度から第1学年の総合的な学習の時間に防災教育を導入し、地域の防災活動を学ぶ学習を開始した。令和6年度からは、従来地域が担っていた「1日目・昼の部」（ブース運営、受付、司会等）を、地域のサポートのもと第2学年の総合的な学習の時間の防災教育の中で生徒が担当する体制へ移行した。なお、飯盒炊飯以降は従来どおり地域が主導した。令和7年度からは、会場を四季が丘中学校に移し、参加児童を宮園小学校へも拡大した。また、各ブース体験と飯盒炊飯をもって解散とし、地域の負担軽減のため宿泊を伴わない形態に見直した。同年度からは、地域代表者と学校管理職・担当者からなる「四季が丘中学校区防災キャンプ実行委員会」を立ち上げ、協議を重ねながら協働で推進している。

(2) 本活動に関わる四季が丘中学校としての目的（非認知能力育成の面から）

- 異学年の児童から頼られたり、楽しかったと言ってもらったりすることで、生徒の自己有用感を高める。
- どのように運営すればよいか、どのように説明すれば伝わりやすいか、楽しんでもらえるかななどを生徒自身が考え、工夫することで、生徒の主体性や、相手意識をもった表現力や対応力を育む。
- 仲間と協力するよさを再発見する。
- 地域の方々に支えてもらっていることを体験的に学び、地域への愛着心をさらに高める。

(3) 令和7年度の実施（第2学年生徒数65人）

① 事前準備

オリエンテーションでは、教職員が前年度の学習を確認し、前年度防災キャンプに携わった3年生代表2人からのメッセージ、地域の代表の方3人から中学生に期待することについて話す流れで実施した。

次に、受付や司会、児童の誘導等の全体運営と、各ブースの運営の役割分担をし、担当ごとに、3年生から引継ぎ説明を受けた。3年生は、プレゼンテーションの準備を熱心に行い、工夫して2年生に説明した。その結果、それまでの活動への参加に消極的であった一部の2年生も、意識が変化し、その後の活動に主体的に取り組む姿が見られるようになった。2年生を指導することを通

期日	内 容
6/20	オリエンテーション
6/27	3年生からレクチャー
7/1	計画を立てよう
7/9	準備をしよう①②
7/15	準備をしよう③④
9/10	準備をしよう⑤
9/19	準備をしよう⑥⑦
9/26	防災キャンプリハーサル
9/26	防災キャンプ最終準備
9/27	防災キャンプ（当日）
10/1	防災キャンプまとめ①②
10/3	防災キャンプまとめ③④
10/7	防災キャンプまとめ⑤

2学年総合的な学習の時間単元計画



3年生から2年生への説明の様子

して、3年生にとっても自己有用感のさらなる高まりにつながったと考える。

当日までの準備では、地域の方々からアドバイスをいただきながら、生徒たちは主体的に活動を展開した。前日のリハーサルでは、2年生が3年生に向けて行い、気付きを言ってもらう機会とした。

② 当日の様子

防災キャンプ当日は土曜日であるが課業日とし、第1学年と第3学年は通常の授業を6時間実施した。第2学年については、通常の授業を2時間実施後体育館に集合し、地域の方々と顔合わせをした。地域の代表からは、改めて中学生への期待を述べられた。その後、担当ごとに準備をした。また、地域の方々に、直前リハーサルを参観していただき、助言を受けた。

AED講習では、廿日市西消防職員が参加者全員に対して救命救急について講話や実演を行った。全員真剣な表情で講師の説明を聞いていた。

各ブースの体験では、児童約50人（小1～小6）が8つのグループに分かれて12分を1クールとして各ブースを回った。児童にとってはそれぞれ1回ずつの体験であるが、ブース担当にとっては8回同じ説明や運営をすることになる。それでも、生徒は緊張感を切らすことなく、むしろ回数を重ねるごとに様々な工夫を取り入れ、自信たっぷりに話をするようになっていった。誘導や説明をする際に児童の目線に立って丁寧に接する姿や、状況に応じて臨機応変に対応する姿、仲間と協力して活動に臨む姿が数多く見られた。普段は目立たない生徒が粘り強く活動に取り組む姿も見られるなど、生徒の新たな一面を発見する機会となった。

各ブースの体験終了後は、生徒たちが片付けを行っている間に、参加した児童たちに中学生へのメッセージカードを記入してもらい、地域の代表から閉会式でメッセージカードの一部を紹介してもらった。

閉会式後、生徒たちは特別教室に移動して会を開き、改め

て地域の代表の方々から「中学生が楽しんでやっていたから小学生が楽しめた」「感心した。よく声を掛け合いながら協力してやっていた」等のねぎらいの言葉をいただいた。生徒たちは皆とても疲れていたものの、満足感に満ち溢れて話を聞いていた。

時刻	流れ
10:45	地域との顔合わせ
10:50	準備・リハーサル
11:30	昼食
12:00	受付開始
13:00	開会式
13:30	AED講習
14:30	各ブースの体験
16:15	閉会式
16:30	地域からのメッセージ

当日の流れ

- | | |
|---|---------|
| ① | 応急処置 |
| ② | 防災マップ |
| ③ | 段ボールベッド |
| ④ | 簡易担架 |
| ⑤ | 車椅子体験 |
| ⑥ | 非常食 |
| ⑦ | けむりハウス |
| ⑧ | 水消火器 |

ブース一覧



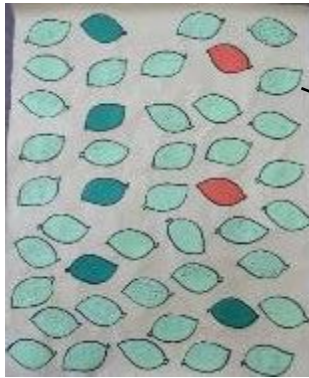
地域の方との直前リハーサルの様子



児童の誘導の様子



ブース「水消火器」の様子



メッセージカード

- ・防災キャンプでは、誘導はやさしく、わかりやすく、1こ1このブースが楽しくて、すごく良い1日です。
- ・お兄さん、お姉さんへ 今日とっても楽しいイベントをよういしてくださってありがとうございます。絵はとってもうまかったです。
- ・防災キャンプ楽しかったです。ありがとうございます。あと1年で中学生なので楽しみです。ありがとうございました。
- ・おにいさん、おねえさん わたしたちのためにじゅんぴしてくれてありがとう
- ・初めての防災キャンプ楽しかったです！ ぼくも、中学2年生になったら、がんばります！
- ・あんないをしてくれてありがとうございます。ほかにもおしえてくれてありがとうございます。またきたいです。

③ 振り返り

防災キャンプ実施後は、担当ごとに1枚の模造紙に活動のまとめをさせた。これを、10月末の文化祭で掲示するとともに、代表者がステージ上で活動報告を行った。この模造紙は、次年度自分たちが3年生になったときに、2年生に活動の説明をする資料とする予定でいる。

④ 生徒の感想

多くの生徒が、その日のデジタル生活ノートに防災キャンプのことを記述していた。なお、デジタル生活ノートとは、本校が不登校対策として生徒とのつながりをもつためのツールとして実施している、双方向のデジタル日記である。

「最後に「楽しかった」と子どもたちが言ってくれたので良かった」や「ほとんどの子が「楽しい」と言ってくれたのですごく嬉しかったし、やって良かった」「みんなとても笑顔で嬉しそうだったので、とてもやりがいを感じれてよかった」等の記載も見られることから、生徒たちの自己有用感の高まりがうかがえた。

- ・今日は、防災キャンプがありました。防災キャンプに来ている子は全員小学生以下でした。僕の担当は、水消火器で、説明のときは、しっかりした声量で、説明ができました。1グループが終わって、最後に「楽しかった」と子どもたちが言ってくれたので良かったです。
- ・今日は防災キャンプがありました。今まで頑張ってきたことが今日できました。結構人が来ててびっくりしたけど楽しかったです。小さい子にも車椅子を体験してもらったので嬉しかったです。ほとんどの子が「楽しい」と言ってくれたのですごく嬉しかったし、やって良かったなと思いました。ほんとに楽しかったです。
- ・今日は防災キャンプがありました。僕は簡易担架で作り方を詳しく教えたので実践でもすぐに作ってくれたのでとても嬉しかったです。担架に小学生の子を乗せて歩くとみんなとても笑顔で嬉しそうだったので、とてもやりがいを感じられて良かったです。
- ・今日は、防災キャンプ当日でした。3時間目に最終確認・準備をして、本番に挑みました。しっかり誘導できるか不安だったけど、グループで協力して運営することが出来たので良かったです。
(略)
- ・今日は、防災の本番でした。本番では、かなり緊張していたけれど、〇〇くんのお陰で、緊張がなくなって、しっかりと成功させることが出来ました。疲れたけれど、楽しかったです。
- ・今日は防災キャンプでした。はじめは小さい子たちをうまくまとめられるか不安で、もっとこうすればよかったと思ったところもたくさんあったけど、うまくできたところもたくさんあったので良かったです。消防士の方たちからの AED のレクチャーで中学生が一人だけ体験する場面でみんなが悩んでいるとき、〇〇君が手を挙げていてすごいなと思いました。体験中もすごく上手にやっていたので驚きました。(略)
- ・今日は防災キャンプがありました。たくさん説明して、結構疲れたけど、来てくれた子どもたちに応急処置のことを知ってもらえて良かったです。やっぱり時間配分は難しかったです。クイズに時間をたくさん取ってしまい、体験できなかった子もいるので、来年はそこも含めて後輩に伝えたいです。

※下線は、特に、自己有用感や仲間のよさの気付きに関わることについて追記したものである。

⑤ 生徒の変容

取組前と取組後に実施した生徒アンケート結果は、次のようになった。それぞれ4段階尺度で実施した。

【事前（6月10日実施）】 (%)

	①	②	③	④	⑤
4	10.8	33.8	41.5	6.2	35.4
3	61.5	58.5	50.8	36.9	55.4
2	21.5	7.7	6.2	41.5	1.5
1	6.2	0.0	1.5	15.4	7.7
肯定	72.3	92.3	92.3	43.1	90.8
否定	27.7	7.7	7.7	56.9	9.2

【質問項目】

- ①自分はクラスの人や友達役に立っている。
- ②先生や友達は、私のよいところを認めてくれている。
- ③四季が丘中学校は、地域の方々に支えられている。
- ④地域や社会の課題を解決できる。
- ⑤災害が起きたときに、どう行動すればよいかわかる。



【事後（10月1日実施）】 (%)

	①	②	③	④	⑤
4	18.5	40.0	50.8	12.3	32.3
3	58.5	53.8	47.7	36.9	60.0
2	23.1	6.2	1.5	40.0	7.7
1	0.0	0.0	0.0	10.8	0.0
肯定	76.9	93.8	98.5	49.2	92.3
否定	23.1	6.2	1.5	50.8	7.7

【選択肢】

- 4 当てはまる
- 3 どちらかといえば、当てはまる
- 2 どちらかといえば、当てはまらない
- 1 当てはまらない

生徒アンケート結果

いずれの質問項目に対しても、肯定的に回答した生徒の割合が増加した。特に、「③四季が丘中学校は、地域の方々に支えられている」「④地域や社会の課題を解決できる」は、それぞれ6.2%、6.1%増加した。また、「①自分はクラスの人や友達役に立っている」は、「4 当てはまる」が7.7%増加し、「1 当てはまらない」は0%となったことから、自己有用感の高まりがアンケート結果からも見て取れた。「②先生や友達は、私のよいところを認めてくれている」も、「4 当てはまる」が6.2%増加している。その他、取組前と取組後で、防災に関わるイメージマップが、劇的に膨らんだ生徒も見られた。

（4）地域との連携

本校では、総合的な学習の時間を使い、直接的な運営に注力して準備してきた。一方、けむり体験のためのテントや簡易ベッド、車椅子など、防災に関わる様々な準備物や、各団体との連携等については、地域の方々が担った。この取組が進んだのも、地域の力が極めて大きかったと認識している。

（5）取組の成果と課題

第2学年の生徒は、落ち着いている一方で、表現することが苦手な生徒が多く、集団としての一体感や主体性に課題が見られた。この防災キャンプの取組を通して、生徒一人一人の成長とともに、集団としてのまとまりや主体性の向上がうかがえた。生徒が「自分たちで創り上げた」という達成感を得たことが、自信につながり、成長を促したと考える。

この取組が成果を上げた要因として、学校と地域がそれぞれの役割を共有しながら取組

を進めたこと、前市民センター長がコーディネーター役となり連携を密にできたことが大きかった。加えて、総合的な学習の時間における計画的な指導の工夫があげられる。例えば、オリエンテーションで生徒に活動のイメージをもたせて役割を自覚させたこと、教師は、ファシリテーターとして生徒の主体性を大切にしたこと、場面場面で地域の方が来校しオブザーバーとして参観していただいたこと等があると考ええる。

また、活動が2年目を迎えたことで、教職員間の連携や共通理解も一層深まった。

一方で中学生については、各ブースでの声が小さく、体育館や屋外などの空間を意識した表現力を身に付ける必要がある。また、小学生の参加呼びかけについては地域任せになっていたため、今後は中学生が積極的に呼びかけて参加者を募るなどの工夫が求められる。

4 校長のマネジメント

本校では、「主体性」「表現力」「協働性」「自己有用感」の4つの資質・能力の育成を目指し、本取組を総合的な学習の時間の中核に位置付けている。地域の協力を得ながら小学生を対象とした実践を展開することで、生徒に目的意識や相手意識を芽生えさせ、さらに自分たちで運営を担うことで主体性を計画的に育む枠組みとした。

校長としては、まず本取組の教育的意義や目指す資質・能力を教職員間で共有し、教育課程上の位置付けを明確にした。その上で、生徒の自己有用感の育成を図るために生徒の主体性を最大限に生かすことを基本方針として示し、教職員には、必要な場面で生徒を支援しながら見守るという指導を求めた。また地域連携においては、学校と地域の双方が目的を共有し、それぞれの役割を明確にしながら協働体制を構築することを重視した。地域が有する人的・物的資源を教育活動に効果的に活用するだけでなく、地域にとっても意義ある取組となるよう双方向の調整を図った。さらに、本取組を単発の活動で終わらせるのではなく、3年生から2年生へと活動を引き継ぐ仕組みを整えることで、生徒主体による継続的な活動となるよう組織化を進めた。同時に、地域の代表者と学校関係者による実行委員会を組織し、特定の個人に依存しない運営体制を構築した。

このように、生徒の自己有用感の育成を目的に据え、教育課程、教職員組織、地域連携を一体的にマネジメントすることで、本取組を本校の特色ある持続可能な教育活動として定着させることに努めた。

5 終わりに

本校が推進してきた「授業改善」「不登校対策」「防災キャンプ」の3つの重点取組は、教職員が共通の教育目標の下で連携し、それぞれの専門性を生かしながら取り組んできたことによって推進されてきた。なかでも、生徒が主体となって運営する「防災キャンプ」は、単なる一教育活動にとどまらず、生徒の成長と地域の活性化を相互に支える地域協働型の教育活動としての意義を有している。

生徒の自己有用感の育成は、学校教育活動全体を通して計画的かつ継続的に取り組むべき重要な課題である。今後も、本取組の教育的意義を全職員で共有・確認しながら、本校の特色ある取組としてさらに定着させたい。そして、教育と地域の力を生かした持続可能な協働体制を一層強固なものにしながら、生徒の自己有用感の育成と地域社会への貢献を両立する教育活動の充実に努めていく。